

技術研究会報告によせて

分子科学研究所管理局長

松澤美作

本研究所管理局技術課主催の技術研究会も昭和51年2月26日に第1回研究会が実施されて以来、回を重ねること6回、本年6月2日全国から多数の参加者を得て、研究会を開催することができた。本誌はその際研究発表されたもの（5編）を中心に、分子研技術課での日常の業績のいくつか（3編）を加えてとりまとめたものである。

本研究会の主旨、役割等については第1回、第2回、第3回報告書の巻頭言で述べられているので重複を避けるが、当初の考え方は対象として、所内と名古屋大学の理工系の技術者に絞り、相互の技術交流をはかることを企図したものであった。しかし、回を追うに従い、この会の存在を伝え聞いて、参加を希望される方々が地域的にも、又人数もふえ、主催者が嬉しい悲鳴をあげる傾向が年々顕著になった。第6回の場合も、会の適正規模から御希望に添えない方々もあって申訳なく思っているが、北は北大から南は都城高専まで、44名の方々が参加され質量ともに充実した研究会となったことは喜びに堪えない。

このように2年半前分子研技術課が播いた一粒の種が、年々大きく育ってきたことは本会の趣旨に共感を抱いて下さった方々の御協力の賜であり心から感謝申し上げたい。

しかしながら、反面、このように全国的な規模にまで広がった研究会が、今後どのように発展していくのが望ましい姿なのであろうか。又分子研のみで、そのような大任を果していくことが果して適切なことなのだろうか。或いは分子研の能力の限界をこえることにならないか。等々の反省もあることも否めない事実であり、所内でもこれらの諸問題について議論していたところである。

幸い筑波の文部省高エネルギー物理学研究所当局の御好意で、同研究所主催の技術研究会が今秋から開催されることになったことは、わが国の国立学校に職を奉ずる技術者の技術研究交流の将来のために画期的なことであると欣快にたえない。願わくばこれらの企てがさらに全国の各地で持たれ、ブロック毎にこれらの技術交流の研究会が催されることを期待する気持や切である。